

函館短期大学の学生ボランティアによる地域経済効果

平成 29 年 8 月 28 日

I. はじめに

函館短期大学の学生が行うボランティア活動はどのくらいの経済効果を地域にもたらしているのか。この問いに答えようというのが本レポートの目的である。学生が行うボランティア活動に関して、本学は平成 23 年（2011 年）3 月 11 日の東日本大震災を契機に、基礎教育科目「ボランティア実習Ⅰ」「ボランティア実習Ⅱ」を新設して単位化した。それまで実態把握が難しかった学生のボランティア活動だったが、「ボランティア実習Ⅰ」および「同Ⅱ」の単位取得を希望する学生に報告書の提出を義務付けたため、本学学生のボランティア活動の実態の把握が可能となった。平成 28 年度中に提出された同報告書を分析した結果、本学の食物栄養学科と保育学科で、延べ 309 名の学生が各種ボランティア活動に参加、平成 28 年度中の学生の総ボランティア時間数は 2,002 時間に上り、1 年間の本学学生のボランティア活動による経済効果は推計で 1,787,072 円に上ることが判明した。

II. 基礎教育科目「ボランティア実習Ⅰ」「ボランティア実習Ⅱ」について

本学では、平成 23 年 5 月 11 日付けの文部科学省及び厚生労働省からの「東日本大震災に伴う各学校養成施設等における学生・生徒のボランティア活動に関する単位付与について」と題した事務連絡をもとに、学則を改正して平成 23 年度後期より基礎教育科目に「ボランティア実習Ⅰ」「ボランティア実習Ⅱ」を新設し、本学学生によるボランティア活動を単位化した。

「ボランティア実習Ⅰ」は両学科の 1 年生の科目として、「ボランティア実習Ⅱ」は両学科の 2 年生の科目として設置した。「ボランティア実習Ⅰ」「ボランティア実習Ⅱ」のいずれも、担当教員（学科長）が承認したボランティア活動の累積時間数が 30 時間以上となった場合に 1 単位を認定することとした。ボランティア活動の実態を正確に把握するため、ボランティア主催者などの証明印が押された報告書の提出を学生に義務付けた。

III. 集計方法と結果

平成 24 年度以降の「ボランティア実習Ⅰ」「ボランティア実習Ⅱ」の単位取得者数は表 1 のとおりだが、報告書を提出したものの、単位を取得しなかった学生が多数いるため、平成 28 年度中に両学科長に提出された延べ 249 名分の報告書の分析を行った。（ボランティア活動の時間数の集計にあたっては、分単位は切り捨てた。例：4 時間 40 分の場合、4 時間として集計）。

表1 平成24年度以降の「ボランティア実習Ⅰ」「ボランティア実習Ⅱ」単位取得者数

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
食物栄養学科 ボランティア実習Ⅰ	7名	1名	0名	0名	0名
食物栄養学科 ボランティア実習Ⅱ	4名	3名	1名	2名	3名
保育学科 ボランティア実習Ⅰ	12名	9名	26名	33名	42名
保育学科 ボランティア実習Ⅱ	3名	13名	6名	5名	6名

学生1人で、複数のボランティア活動に参加しているケースがあるため、延べ249名の報告書が実際には何名の学生から提出されたものなのか、学生の実数を調べたところ、表2のとおりであった。

表2 平成28年度 ボランティア活動に参加した学生実数

学科 学年	食物		保育		合計
	1	2	1	2	
延べ人数	0	9	189	51	249
学生数	0	3	49	28	80

平成28年度中の年間のボランティア時間数とボランティアを行った日数をみると、表3のとおりであった。

表3 平成28年度 ボランティア時間数と日数

学科 学年	食物		保育		合計
	1	2	1	2	
時間数	0	146	1486	370	2002
日数	0	26	307	94	427

本学学生のボランティア活動による地域経済に及ぼす経済効果を、平成28年度の北海道における最低賃金である1時間=786円で試算したところ、表4のとおり、ボランティア活動を時給換算した総賃金は1,573,572円となった。さらに1日=500円で交通費を試算したところ、交通費の総額213,500円となり、本学学生のボランティア活動による地域経済に及ぼす経済効果は、時給換算した総賃金と交通費の総額の合計で推計1,787,072円に上ることが判明した。

表4 平成28年度 ボランティア活動の学科・学年別経済効果

学科 学年	食物		保育		合計
	1	2	1	2	
賃金	0	114,756	1,167,996	290,820	1,573,572
交通費	0	13,000	153,500	47,000	213,500
合計	0	127,756	1,321,496	337,820	1,787,072

学生が参加したボランティア活動のうち、経済効果が高い順にその内容をみると、表5の通り、1位幼稚園運動会、2位小学校陸上競技大会、3位函館マラソン大会、4位福祉施設、5位特別支援学級・学校の順番となった。

1位の幼稚園運動会は、昨年2位から今回1位に上がった。特に今回多くの園で要請があったこと。学生達は実習が控えていることと、さらには、実践的な学びができる事により、沢山の学生が参加したと考えられる。また、2位・3位は、いずれも陸上競技へのボランティアである。これは、平成28年度から函館でフルマラソンが開催されたことから、本学に道南陸上競技協会から日本陸上競技連盟B級公認審判員取得に関する要請があり、60名が審判取得をしたことが影響したものとする。

4位の福祉施設においては、主に福祉施設でのバザー、お祭りの手伝いとなっている。

5位の特別支援学級・学校については、昨年は3位であった。活動内容は、障害者・障害児のスポーツ教室の開催準備、後片付け、利用者支援などである。

表5 平成28年度 ボランティア活動の内容別経済効果

内容	時間数	日数	平均ボランティア時間数	賃金	交通費	合計
幼稚園運動会	409	85	4.8	321,474	42,500	363,974
小学校陸上大会	377	68	5.5	296,322	34,000	330,322
函館マラソン大会	357	55	6.5	280,602	27,500	308,102
福祉施設	245	42	5.8	192,570	21,000	213,570
特別支援学級・学校	158	60	2.6	124,188	30,000	154,188
函館青年会議所行事	144	32	4.5	113,184	16,000	129,184
クリスマスファンタジー	61	25	2.4	47,946	12,500	60,446
スポーツ大会	44	4	11.0	34,584	2,000	36,584
保育園	42	3	14.0	33,012	1,500	34,512
高丘町夏まつり	32	22	1.5	25,152	11,000	36,152
傾聴	31	8	3.9	24,366	4,000	28,366
病院・医療	30	10	3.0	23,580	5,000	28,580
熱帯植物園	26	4	6.5	20,436	2,000	22,436
児童館	23	5	4.6	18,078	2,500	20,578
食育	9	1	9.0	7,074	500	7,574
ハロウィン	8	1	8.0	6,288	500	6,788
つどいの広場	6	2	3.0	4,716	1,000	5,716
合計	2,002	427	4.7	1,573,572	213,500	1,787,072

IV. 評価

ボランティア参加に関しては、表3の通り、保育学科学生の総参加時間数は、1486時間で74.2%と圧倒的多数を占め、実際の参加学生数も、表2の通り、保育学科1年49名、2年生28名で保育学科学生の総数は、80名と全体の96.3%を占めた。

その背景には、①保育学科では、将来保育者となっていく時に大切な要素の一つである、コミュニケーション能力の向上など教育的観点から積極的にボランティア活動の参加を推奨していること。②平成 26 年度より、保育学科の学生を中心とした「ボランティア部」が発足し、学生が積極的に活動に参加している。③幼稚園、保育園、特別支援学級・学校など、授業の目的との関わりが比較的多い主催者からのボランティア依頼が食物栄養学科より多いことなどがあげられる。

さらに今年度特筆的な事として、本学の所在地である高丘町会との連携による「夏祭り」の手伝いのボランティアを行ったことがある（ボランティア実習を履修していない学生も含む）。

内容としては、やぐら組、テント張り、使用機材の運搬、子供お神輿引率、当日の手伝い、食物栄養学科においては「地域課題解決型授業」、後片付け等であり、準備から後片付けまで学生・教職員が携わった延べ人数は 107 名に上った。

一方、食物栄養学科の平成 28 年度の学生の実質的な活動参加人数は、表 1 の通り、3 名に留まっており、今後、学科としてボランティア活動にどう取り組むか検討する必要があると感じる。

全体を通しての総括としては、平成 27 年度のボランティア総時間数は、2260 時間であった。しかし、平成 28 年度は、前年度より 258 時間少ない 2002 時間であった。何故、前年度より低い結果になったかを分析すると次のような点が考えられる。

保育学科 1 年次生については、ボランティア単位取得者は、前年に比べて 9 名多いが、履修者全体として、30 時間という単位取得時間ぎりぎり駆け込みのようにして、単位取得したことが、昨年度を下回った大きな要因の一つと考えられる。また、保育学科 2 年次生は、土曜日授業があることと、長期間の実習が行われたことにより、ボランティア実習を履修していても、30 時間を越えることが出来なかったことが分析の結果うかがえた。

今後の対策としては、学生達にボランティアの意義・必要性を分かりやすく伝え、座学だけでは学ぶことができない利点を理解してもらう工夫をし、より多くの学生がボランティアを率先して行うよう働きかけていきたい。

文責 ボランティア実習担当・教授 松田賢一